

## 国内経済情勢

### 概観

国際収支の改善は一段と進んでおり、6月の貿易収支は久方ぶりに黒字となった。信用状などからみると、当面、このような傾向が続くものと思われる。またこのところ、生産調整の動きが広がっており、設備投資についても、機械受注の著しい減勢、新規計画見合せの動きなどが目立つ。

このように、景気調整は大勢として進展をみせているが、なお問題が残されている。6月の生産は+0.6%となり、依然はっきりした減勢を示すに至っていない。しかもごく一部を除いては、製品在庫の圧迫はここ数か月むしろ弱まりぎみであり、企業の金繰りひっ迫も、業種により区々ながらひとところに比べ薄らぎは始めている。鉄鋼などにみるように、市況の持直しなどから、景況に対するきびしい気分がやや失われる面もみられる。ここでもし、先行きに対する安易観が生まれるならば、コスト調整その他本格的な調整努力が弱まる恐れなしとしない。

#### 生産、なおはっきりした減勢を示さず

6月の生産(季節調整済み)は+0.6%と微増し、依然はっきりした下降を示していない。鉄鋼、繊維がわずかながら減少し、窯業も定期修理が響いてかなりの減産となった。反面、石油・石炭製品が前月定期修理による大幅減少の反動で著増したほか、皮革、ゴムなども、消費の堅調を映じて増加した。ここ3~4か月の動きをみても、消費財、とくに耐久消費財の増勢が目立つ。生産財および投資財には伸び悩みがみられるが、水準はなお高い。

5月の出荷は、4月-2.9%と減少したあと、

+3.1%と大幅の増加を示した。これには資本財の反動増もあり、実勢はそれほどはみられない。前年同月比でみると、むしろ出荷の増勢は鈍化の傾向にある。耐久消費財の出荷はなお堅調を続け、投資財、生産財にもまだそれほどはっきりした減勢はあらわれていない。

5月のメーカー製品在庫は、4月-1.6%に続いて-0.7%と減少し、在庫率指数も3~4月に増勢が頭打ちとなったあと、5月には3.7%の減少を示した。このように生産がはっきりした下降に向かわないにもかかわらず、製品在庫の増勢が止まったことは注目すべき動きである。

最終需要についてみると、機械受注は一段と減勢が目立ってきた。また新規計画については、繰延べの動きがかなり広範化しつつある。しかし、機械販売や資本財出荷などは増勢こそ鈍っているが、その水準はまだかなり高い。工事ベースでみた設備投資は、さすがに勢いを失いつつあるが、目先き大きく落ちるまでには至っていない。

#### 商品市況、繊維、鉄鋼に小もどし

最近の商品市況は、大勢軟調のうちに、繊維、鉄鋼が小もどしをみせている。鉄鋼は、6月下旬ごろから市況対策(粗鋼2割減産、中小メーカーの製品買上げなど)を期待して、訂正人氣がにわかに広がってきた。まず、市況悪化の著しかった中形形鋼、厚中板などに小反発が目立った。最近では、これらに騰勢一服気配がうかがわれるが、代わって、軽量形鋼、線材2次製品などにじり高商状が広がっている。繊維も、6月半ば以降操短強化や輸出の好調により小もどしており、人絹糸、綿糸、スフ糸などを中心に底堅さを増している。その他の品目では、木材が梅雨あけで小反発したが、燃料、化学、紙、非鉄など総じて軟調が続いている。

このように、最近の商況には、これまでの全面的な軟化とはかなり異なった動きがみられるが、減産決定や滞貨金融を期待した人气的要因によるところが大きいので、これがそのまま市況の本格的な立直りにつながるとはみられない。

本行卸売物価(食料を除く)は、6月-0.6%と続落したが、こうした商品市況を反映して漸次落勢を弱め(6月上旬-0.2%、中旬-0.1%、下旬保合)、7月上旬には+0.3%の上昇となった。一方、6月の小売物価(食料を除く)も繊維、木製品の上昇に+0.8%の続騰となった。この間消費者物価(6月、東京)は、住居費がかなりの上昇をみせたにもかかわらず、光熱・被服費の季節的値下がりをも主因に+0.1%と微騰にとどまった。

#### 貿易収支尻、黒字に転ず

6月の国際収支は、総合勘定で37百万ドルとかなりの黒字となった。貿易収支が、輸出の増勢と輸入の落ち着きによって、久方ぶりに黒字に転じたため、経常勘定の赤字は4百万ドルに縮小した。もっとも、貿易外収支の赤字は、6月には一段と大きくなった。また資本勘定は、世銀借入、農産物借款などもあって、59百万ドルの黒字となった。

輸出は高水準を続けているが、とくに鉄鋼、化学品の伸びが目立ち、水産かん詰、雑貨、軽機械なども増加している。引き続き米国向けの伸びが中心であるが、欧州向けもこのところ好転をみせている。輸出の好調は、信用状などの動きから見ると、ここ当分の間続くものと思われる。一方輸入は、輸入原材料の在庫圧縮と、鉄鋼、繊維など輸入関連業種の減産傾向を映じて、引き続き減少している。現在の輸入原材料の在庫水準からみて、生産がいま程度で推移する限り、くず鉄などを別とすれば、今後大きな在庫食いつぶしが進む可能性はあまりない。輸入水準がさらに一段と低下するかどうかは、生産動向のいかにかかっているといえよう。

#### 金融情勢、ひっ迫のうちにやや引きゆるみ

6月の金融市場は、比較的平静に推移した。財政資金は地方交付税交付金をはじめ諸支払が進むとともに、外為会計も27億円の払超(前年揚超176億円)となったほか、租税収入も即納率低下などから、伸び悩みが目立ちはじめた。このため財政の揚超は月中283億円(前年、揚超960億円)にとどまり、従来の強い揚勢はかなり弱まってきている。一方銀行券は、月中981億円の増発となり、平均発行高でも前年同月比+16.9%と前月(+16.5%)を上回った。これは公務員の夏期手当や民間賞与の支払により発行高が一時的に高まったためであり、従来からの増勢鈍化基調が変わってきたとはみられない。このような情勢を反映して、本行貸出は月中1,415億円の増加となったが、前年(1,932億円増)に比べればこれを下回った。

6月の全国銀行貸出は、1,498億円とやや大幅な増加であったが、増加額は前年同月(1,616億円)をかなり下回り、都市銀行を中心として貸出選別態度が続いている。貸出金利も引き続き上昇傾向をたどった。

一方、企業の資金繰りには、このところやや変化が目立ってきた。景気調整が進んだところでは、金繰り難も峠をすぎた感じがあるのに対し、鉄鋼にみるように、生産、投資の調整が遅れた一部業種では、金繰り難の声が高まり、いわゆる滞貨資金の需要が強まってきた。こうした動きにつれて従来切詰めないし繰延べを余儀なくされてきた決済のための資金需要が、その他でも台頭しはじめてきた。銀行の融資態度は依然抑制基調を失ってはいるが、金融市場が徐々に引きゆるみに向かう際だけに、動向が注目される。

なお、中小企業のコネは、業容面の調整が進んでいる一方、専門金融機関を中心に融資も比較的円滑に続いており、総じて平静に推移している。不渡手形の発生状況にも格別変化は生じていない。